してくる噴石や降灰をかいくぐり、軽石の海へ決死の覚悟で船をこぎ出し、桜島島民の救助に向かった和田畩太郎、川畑畩太郎、坪内八次郎、柏木万吉など協和の先人たちの奮闘も忘れてはなりません。

桜島は今も活発に活動を続けており、火山灰の多くが北西風に乗って、時にはドカ灰となって降り注ぎ、私たちの生活や農作物などに大きな影響を及ぼしています。しかし、今後も私たちは桜島とともに生きてゆかねばなりません。

降灰の積もったビワの葉

3．漁　業

藩政時代から協和地区には海潟と中俣の漁村（浦）に役人が住む浦屋敷があり、一本釣りや地引網漁業など小規模の漁業が営まれていました。海潟の小浜の山の上には魚見（いおん）の場所があり、シビやソウダガツオ（協和地区ではめっか）の群を見つけると浜に大声で伝え、浜からは何隻も船を沖に漕ぎ出して網で囲い込む漁業法もありました。しかし、大正３年（１９１４）の桜島噴火による瀬戸海峡の閉塞は潮流が変わり、シビなどが回遊しなくなってしまいました。

明治以降は定置網漁業や八田網漁業（正しくは、焚入八田網漁業）もさかんになりました。八田網漁業は夜間に火を焚いて魚を集めて取る漁法です。集魚の火は初めは松の根を焚いていましたが、後にはカーバイト灯やバッテリー灯に変わりました。明治３１年（１８９８）、政府が遠洋かつお漁業奨励法を施行したことに伴い、明治３９年（１９０６）、鹿児島県水産技手・島田覚治（垂水田神出身）の指導により、カタクチイワシがカツオの餌に適しているため、海潟で生簀が試験的に実行されました。生簀は孟宗竹で編んだ約３メートル四方の生簀籠が用いられ、獲ってきたカタクチイワシは遠洋漁業の船が買い付けにやってきました。

生簀籠の輸送

カタクチイワシが豊富にとれる協和地区の漁業は枕崎や山川などのカツオ漁業と密接につながり、明治４５年（１９１２）揖宿郡喜入の前之